他性の言語

—減圧的他者と言葉の沸騰—

杉本 隆久

はじめに

言葉の果たす役割だけを重視することが唯一の使命でもあるかのように振舞う輩が哲学の一大潮流を形成する今日においてもなお、「他者」をキーワードとする「哲学」の系譜に属する思想が細々ながらも途絶えることなく存在していることは、その存在意義が忘れ去られぬためにも強調しておかなければなるまい。しかしながら、この思想の内に深く分け入るならば、言語哲学とは全く違った仕方ではあるが、「言葉」というものを考究の対象としていることが見て取れる興味深い事実があることも忘れてはならない。それもその筈、人間的現象において、他者とは言語と切り離せぬものでもあるから、言語とは関係を持たぬ他者、或いは他者なしの言語のみを真剣に議論するだけで満足しているほうがどうかしているということなのだろう。言うならば他者に見向きもしない言葉を対象とした議論など、重宝する価値もないと言ったところであろうか。従って、言語について語る上で他者をも考慮すること、また他者について語る上で言語をも考慮することは、ある意味当然の、そして至極健全なことなのであろう。

しかしながら、このような「言語」と「他者」との相関関係を巡る議論が、果たして明確なものとして定義されてきたどうかといえば、私たちは首を傾げざるをえない。ところで、「他者」問題に注目した思想の系譜のうちに数え上げられるであろうメルロ＝ポンティは、「他者」と「言語」との関係について少なからず言及していると考えられるが、では「言葉」と「他者」との関係を

メルロ＝ポンティはどのようなものとして捉えていたのであろうか。

このような問いを抱懐しつつ、本稿の企ては「言語」と「他者」との相関関係を巡る議論を明確なものにするとは言わないまでも、「他者」と「言語」との相関関係の問題に対してある一つの見方を提示するために、メルロ＝ポンティの議論を取り上げ、彼の主張を導出することにある。それ故、断っておかなければならないが、本稿ではメルロ＝ポンティを中心的に扱うので、哲学的議論が山ほどあり、またそれぞれが千差万別である「他者」、「言語」に関するあらゆる議論に対して配慮することはできそうにない。もちろん可能な限り配慮することに努めたいと思うが。従って、例えば<他者>という概念にしても、本稿で用いられる<他者>概念は認識論的な図式に基づいた「他者」ではないし¹、また<言語>にしてみても考察の対象は日常的な言語というよりも、むしろ「心理学者や言語学者が実証的な学という名のもとに、この問題を考察することを拒む」(PP, p. 217)²言語の起源の問題、つまり創造的言語に関するものとなるだろう。以上の前提を踏まえた上で、早速、藪の中に分け入って行くことにしよう。

1 <原初的な言葉>と<二次的な言葉>

メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』の中で、「液体が沸騰するときに泡立つように、存在の厚みの中に空虚なゾーン(zones de vide)が形成され、これが外部(dehors)に向って移動するときにはじめて話そうという気持ちが生まれる」(PP, p. 229)と言っている。なんとも難解な表現ではあるが、しかし、隠喩的で含蓄のあるこの一文が<言語>と<他者>の関係を読み解く手がかりを私たちに与えてくれている。

まず、この箇所が目したいことは、ある条件が整わなければ発話は実現されないということである。つまり、発話とは単なる反射のように生じるものではない。しかし、先に少し触れたように、メルロ＝ポンティが言っている「話そうという気持ち」とは、単なる日常的な会話における発話行為について言われているものではないということに注意しなければならない。彼は「本物

の言葉」(une parole authentique)について、つまり沈殿した習慣的言語ではない創造的言語について語っているのである。このことはこの引用文のすぐ後で「まだ定式化されていない意味はこの発話の行為に、外部に自らを表現する手段を見出すだけではなく、それ自体における実在を獲得するのであり、真の意味として創造されるのである」(PP, p. 229)とされていることから明らかであろう。

創造的言語ということに関して若干の説明を施しておく、創造的言語とは「原初的な言葉」(la parole originaire)、つまり「例えば、生まれてはじめて言葉を話し始めた幼児の言葉、恋するものが自分の気持ちを打ち明ける言葉、「はじめて言語を語った人間」の言葉、伝統を超えた場所で、原初的な経験をあらわにする作家や哲学者の言葉」(PP, p. 208)のことである。これはいわゆる経験的な言語、つまり「二次的な表現」(une expression seconde)、ないし日常的、習慣的言語とは異なるものである³。

では、このような「原初的な言葉」を生み出す条件とは如何なるものなのであろうか。具体的に言うと「液体が沸騰するときに泡立つように、存在の厚みの中に空虚なゾーンが形成され、これが外部に向かって移動するとき」とは、どのようなことを指し示しているのであろうか。

問題とすべきは「気泡」であり、「空虚なゾーン」であろう。しかしながら、この条件がどのように齎されるかも考える必要がある。つまり創造的言語を誘発する条件そのものを考える前に、条件の条件を尋ねなければならない。

一般的に、液体、例えば水のような液体が沸騰するためには、液体の温度を上昇させればよいことは言うまでもない。例えばポットの水を加熱すれば、自ずと湯になり沸騰する。或いは、圧力を下げることによっても液体は沸騰する。では発話の場面において、沸騰の原因となる「火」或いは「減圧」とは何であらうか。

ところで、安定した液体が安定した気圧条件において沸騰しないことは言うまでもない。だとすると、「火」や「減圧」とは、安定状態を震撼させる条件であることになる。つまり、「発話」を促すような作用がない状態とは、安定的状態であるということになるだろう。しかし、発話が可能となるためには、

安閑を毀壞する「火」や「減圧」のような何か働きかけなければならない。逆にいえば、安住してはられないような変化が生じるからこそ、私たちは言葉を語らないではいられなくなるということである。けれども、私たちは普段の日常的な生活において、「原初的な言葉」を吐かねばならぬような変化に遭遇することはそう頻繁にあるわけではなく、基本的には「二次的な言葉」、つまり既に習慣的に獲得した言葉を用いることで円滑に安定的な生活を送っている。いわば出来上がったラングの中で既に正当な権利を獲得したパロールを反復しているに過ぎない。しかし、この平和を揺るがす何者かが存在するのである。

メルロ＝ポンティは「話そうという意図は、開かれた(ouverte)経験の内には生じない」(PP, p. 229)とも言っている。ということは、閉ざされた経験の内では「本物の言葉」は成立しないということになると考えられるが、しかし、閉ざされた経験のようにも思われるこの安定状態は、実は開かれている。水が沸騰状態へと変化するように、ある状況下では何らかの影響を受けるということがありうるからである。だとすると、開かれているということは影響を受けるということ、即ちそれ自体の内的要因によって変化を迫られるということではなく、ある外部的な条件の働きかけによって変化がもたらされるということになるだろう。

しかし、外部的条件をすぐさま「他なるもの」、「他者」、「外部」と考え、「火」や「減圧」とみなしてしまうことは危険である。というのも、日常生活においてでさえ、つまりメルロ＝ポンティが言うように「二次的な言葉」を話しているときでさえ、話す私以外の他人というものが私に現前しているに違いないからである。会話とはあたりまえのように誰かに語りかけるものであり、誰かの発話を受けて私がそれに応答することである。しかし、先にも触れたように、創造的言語は単なる反射ではない。或いは反射という言葉に語弊があるならば、思考といってもよい。つまり、他人に知的に難解な(例えば数学におけるような問題を考えていただきたい)応答を迫られ、思考による吟味を経て返答したからといって、それが創造的言語となるということではない。外部的条件がある条件を引き起こすのでなければ、「本物の言葉」には至り得ないのである。従って、単なる外部的な条件は、創造的言語を成立させる十分条

件ではありえない。だが、ここで外部という考え方が退けられるわけでもない。この「外部」、「他者」、「他なるもの」といったものが発話の条件を満たすとき、それはどのようなときであるのかが考察されねばならない。

2 <言葉>と<他者>

ところで、ここで安定状態についてももう少し補足しておかなければならないのだが、批判を恐れずに言うと、外部へと開かれている安定状態は、実は閉じた状況下にある。言い換えるならば、安定状態が外部へと開いている状態それ自体は閉じているということである。それは体系が閉じた系であるのと同様である。つまり日常生活において私たちが「二次的な言葉」を話すとき、それは既存の言語体系の内から出来合いの言葉を選択して話すということであり、言語体系自体は既に確立されたものとしてあるということである。つまりある体系内では質量保存の法則が成り立つということでもある。しかしながら、「原初的な言葉」とは、新たな意味を纏った言語を構築するのであるから、この言語体系から溢れ出るものであり、つまりは体系の外へと向かうものである。それ故、創造的言語においては、今まで見てきたような外部とは異なる<外部>が到来することになる。そして、「本当の言葉」において重要なのは、この<外部>である。

さて、創造的言語には、なにやら外部ではない<外部>が関係していることが曖昧ながら見えてきたように思われるが、しかし、この充溢にも思われる体系の<外>とはいかにして生まれるのだろうか。

例えばメルロ＝ポンティは『世界の散文』の中で「世界にとって最も無縁なもの、つまり、意味、私たちが現在や未来や過去、存在や非存在…に引きずり込む様々の誘引力の姉妹としての誘引力、まさにこうしたものを世界に到来させるためには、ものの充実のただなかである種の窪み(creux)、ある種の裂け目(fissures)を作るだけで十分なのであり、そして私たちは生まれてこの方そうしている」(La prose du monde, p.85)といている。無論、窪みや裂け目は私たちが自発的に作り出すものではない。窪みや裂け目は自ずと出来上がってしま

うのである。それは先に示したように、「開かれている」ということに関係がある。つまり、言語体系とて、実は<外部>へと開かれているのである。それは現在という時間が未来へと流れ込むように、今あるものは<他なるもの>の手へと引き渡されていくのである。もし時間が経過しないとしたら、言語体系は安定状態のままとどまり続けることができるのかもしれない。しかし、時間の中に位置付けられている以上、流動化はやむをえないのである。

従って、世界はまさに<開かれている>がゆえに、<外部>は到来するのである。そして、創造的言語の条件の条件とは、この<外部>に他ならない。つまり<開かれている>ということは<外部>を産出しつづけるということであり、この<開き>ないし<外部>がパルメニデスの球のように充実した体系内の圧力を減少させるのである。

こうして日常が減圧される時、ハイデガーが言うように私たちは単なるおしゃべりに満足することはできなくなる。<語り>が要求されるのである。しかしながら、何故、そしてどのようにして、<外部>が到来することで、或いは<減圧>されることで、「原初的な言葉」を語る条件が整うことになるのだろうか。或いはこういうべきであるかもしれない。つまり、(条件の)条件は整ったが、語る必然性など全くないのではないか。既存のラングで事足りるのであるなら、それでいいじゃないか、と。

確かに、<外部>に曝されているからといって、それだけでは創造的言語が生まれる根本的な要因とはならないことは言うまでもない。事実、私たちは多くの場合、世界は開いているにもかかわらず、「二次的な言葉」で満足している。しかしながら、稀にはあるかもしれないが、<開いている>がゆえに、<外部>が他者を到来させることがありうるのである。つまり、<外部>は<外部>である以上、対象として内部に決して現前することはないが、しかし、そのような<外部>は内部に他者を生み出す役割を担うのである。<外部>の<減圧的他者>ではない他者が到来するということである。具体的な例で考えたほうが、はるかに解かりやすいかもしれない。例えば、メルロ＝ポンティが恋をする場面を考えてみることにしよう。

もちろん以下の記述は、きわめて出来の悪いフィクションである。

何の変哲もなく繰り返しているように思われた毎日の生活をメルロ＝ポンティは送っていた。しかし、ある日、彼の目の前にザザという少女が現れる。彼女は今まで彼が見てきた女性とは明らかに異なっているように彼には思われた。それ以来、メルロ＝ポンティは彼女を思い出すたび、そして彼女を見かけるたび、何故か胸が焦げるような思いがした。世界は一変し、今まで見ていた世界とは全く違う世界のように見えた。胸の痛みは益々増し、自分が自分ではないようにも思われた。そして彼は何かに突き動かされるように、語らずにはおれず、彼女の所に赴き、彼女の前で言葉にもならない言葉を語りだした。彼女についても、自分の胸の痛みについても何を語ればいいのかわからないまま。それから幾年か経って『行動の構造』の執筆に取り掛かった。

さて、もしかしたらこのような経験をしたことがあるという人も中にはいるかもしれない。それはそれで置いておくとして、メルロ＝ポンティ自身、恋というものを特別視している以上、恋とはまさにこのような経験であり、そして創造的言語を齎すものでもあるのだろう。つまり、世界が開かれているということは、恋に落ちる可能性があるということなのだ。或いは、私の日常を一変してしまうような他人が現前するということでもある。このとき、私の前に現れた他者とはまさに、「存在の厚みの中に形成された空虚なゾーン」であり、或いは私の内に芽生えた胸の痛みも同じように「空虚なゾーン」であるだろう。そして、この「空虚なゾーン」によって、今までの世界が変化を迫られることになる。つまりどう表現したらいいかわからないが、不安を掻き立てるような感じでもあり、曰く言いがたい。私はこのロカントンの吐き気にも似た不安や不気味さを何とか解消するために、つまりこの状態を何とか理解するために語りだす。いや語ることを強いられる、或いは語らされるといったほうがよいのかもしれない。こうして世界は新しい意味を纏うことになるのである。そして同じように、他人は了解され、自分自身も新しく生まれ変わるのである。（無論、恋とは一言で解消できるようなものではなく、その作業を何度も繰り返さなければならないものかもしれないが）。

従って、「気泡」ないし「空虚なゾーン」とは、減圧によって引き起こされた他者の臨在ということが出来るだろう。しかしながら、もう少し精緻に検討

する必要がある。というのも、「空虚なゾーン」が「外部に向って移動するとき」という箇所が未だ明確ではないようにも思われるからである。例えば、事態を自己に限定して考えれば、それはさほど難しくはなく、つまり、自己の内に「気泡」のような他者が生まれ、それが自己の外部に移動するとき「言葉」となると考えられなくもない。しかしながら、それでは「存在の厚み」と言われることの説明がつかないようにも思われる。もちろん、自己の状態に限定する解釈が全くメルロ＝ポンティの考え方と異なっているかといわれればそうでもない。「存在」を「実存」と同義にとればいいからである。だが、「存在の厚み」は「世界の厚み」と言い換えても不適切ではないようにも思われる。というのもメルロ＝ポンティの文脈では、この両者は同じ〈肉〉で出来ているということになるからである。それ故、「存在の厚み」を「実存の厚み」だけでなく「世界の厚み」としても考える必要がある。

問題は臨在する他者である。ここで重要なのは私に現前する他者ではなく、その他者の他者性である。確かに他者は開きによって齎される。しかし、根源的に齎されるのは他者の他者性である。それは現前する他者の「見えないもの」であり、他者において理解を要求するものであり、私が語ろうとするまさにそのことでもある。つまり、私は目の前の他者に語りかけるのではなく、その他者の非現前的なものに語りかけるのであり、或いはそれを語るのである。このように他者の他者性を「空虚なゾーン」と考えるならば、上述の問題に答えを提出することが出来るかもしれない。つまり、〈減圧的他者〉によって、世界の内に突如として泡のような一人の他者の〈外部〉が生じる。そしてこの充実する存在の中に真空のように生まれ出た〈他なるもの〉は、その固有の権利を獲得するために、つまりまさに〈外部〉たるために〈外部〉に向う。このようにして「空虚なゾーン」は〈外部性〉を獲得するに至るのである。そしてそれがまさしく〈外部〉となるとそれを語るために、要するにそれを捉え包括するために私は創造的言語を語るのである。

さて、「世界の厚み」における「空虚なゾーン」がこのようなものであるとき、「実存の厚み」における「空虚なゾーン」も現前化可能な、つまり対象化可能な他者であることが出来ないことは理解できるだろう。先に胸の痛みと呼んだもの、即ち私の内なる他者とは、いわば自己の他者性とでも言うべきもの

であり、語られる以前においては、つまりそれを含み込んで自己を対象化する以前には未規定なままにとどまるものなのである。

3 <減圧的他者>と<他者の他者性>—二つの見えないもの

しかしながら、事態は振り出しに戻るようにも思われる。というのは<減圧的他者>ないし<開き>が、以上のような他者の他者性や自己の他者性を誘起するものであるとしても、もし仮に日常や体系のうちに内在し得ない<外部>でありうるならば、両者の差異はそれほど明確ではなくなるように思われるからである。他者の他者性も<外部>であり<開き>であるならば、権利上、両者は同じ資格をもつことになるだろう。

しかしながら、根本的に両者は異なる。というのも、他者の他者性は言語のうちに含みこまれるものだからである。簡単に言うならば、他者の他者性とは新たな言葉を要求するものであり、言葉の実現によって、日常や体系の内に含みこまれ得るものなのである。つまり、創造的言語の実現とは、世界の新たな客観化であり、新たな体系化なのである。それ故、語りがなされることで日常は一変するが、それは同時にまた新たな日常が築き上げられるということでもあり、新たな世界の実現なのだといえるだろう。

これに対して<減圧的他者>は、語られることによって意味を獲得する他者の他者性とは異なり、本質的に言語化されることはない。つまり、客観化を逃れるものである。厳密に言うと、客観化を成り立たしめる根源的な構造、言い換えるならば創造的言語を可能にする構造そのものでもあるのだが、それは根源的な<開き>である。簡単に述べるなら、他者の他者性が創造的言語を齎すものであるとすると、<減圧的他者は>そのような他者性を生み出す構造、つまり<開在性>と言い換えることができるかもしれない。或いは、現前化を可能にする根源的な非現前であるといってもいいだろう。従って、<減圧的他者>とは、あらゆる現前化を可能にする基盤なのである。

しかしながら、ここで重要な指摘をしておかなければならない。というのは、今まで何の注意もなく用いてきた<減圧的他者>としての<外部>、<開き>、<他なるもの>、<他者>といったものは、実は日常や体系の、即ち現

前の絶対的外部ではありえないということである。このようなく外部>といえど、実はある意味で内部の内なる外部であり、メルロ＝ポンティの言葉を借りるならば「根源的に現前し得ないものの根源的現前」なのである。そしてまさにこのようなく外部>はまったく隠れなきゆえに、創造的言語という神秘が可能なのである。

この点に関しては、おそらくもう少し説明が必要であるかもしれない。例えば、<減圧的他者>としての<外部>が絶対的な外部であったとしたら、このような外部は何ら日常を変化させることはない。或いはこのように設定された外部は、日常を超越するものではありえない。換言するならば、日常や体系の外部に日常や体系を超えるものを設定することは、何ら日常や体系を超えたことにはならないということでもある。つまり、純粋な外部であっては内部と関係を持ちうることは出来ず、創造的言語を産出し得ない。そして産出し得ないのであるならば、内部を超えるとは言い得ないことになるからである。これは、一貫してメルロ＝ポンティが主張してきたことであると思われるが、例えばそれは<弁証法>という彼の言葉が示すように、体系を打ち破るものは体系の内部にあるということであり、同時に（新たな）体系が形成されるためにも、<外部>は内部になければならないということでもある。つまり、メルロ＝ポンティによれば、<外部>とは体系を構成するものでありながら、体系を克服するものでもあるということになるのである。そして、体系を構成するためにも、<外部>は外部であってはならず、また<外部>が内部から超え出るためにも、<外部>は外部であってはならないのである。つまり、メルロ＝ポンティは純粋な体系が不可能であるということが言いたかったわけではなく、体系が如何に成り立つのかということにたえず配慮しつづけた思想家であったということが出来るかもしれない。

以上が、メルロ＝ポンティにおける<言語>と<他者>との関係であり、<言語>とはまさしく<他者>の介在によってもたらされるものであり、それ故、ある意味で<他性>を帯びたものなのである。

4 日常的言語と失語症

さて、ここからは本稿の目的とは若干離れることになるが、補足的にメルロ＝ポンティが何故、創造的言語にこだわったのかということに対して僅かながら考察を施しておくことにしたい。

例えば、上述の引用の前でメルロ＝ポンティは「一般的な知性の衰弱の兆候は全くないし、語も意味に基づいて配列」(PP, p. 228)できる患者の例を挙げている。この患者は基本的に話すこと、会話することは出来るのであるが、しかし、自分から話し出そうとしたり、創造的な言語を語ることも出来ない。メルロ＝ポンティの分析によると、この患者は「現実の明証性と十全さを備えているので、あらゆる問い掛け、可能なものへのあらゆる言及、あらゆる驚き、あらゆる即興が抑止される」(PP, p. 228)のであり、つまり世界との生きた関係を構築してはいないということになる。メルロ＝ポンティは、つまり創造的な言語が世界や他人との生きた関係のなかで生み出されるものとして考えているのであり、世界や他人に興味を示さない患者は「生きられる世界」から乖離してしまっているというのである。

しかしながら、メルロ＝ポンティはこのような症例に言及することで本質的には何を言いたかったのであろうか。

患者には知的な衰弱が見られないにもかかわらず、或いは会話は出来るにもかかわらず、創造的な言語を話すことは出来ないということがポイントであろう。もちろんこの引用箇所のある章で、経験主義的な言語観も主知主義的な言語観も批判されているのであるが、この症例への言及が意味するところは、まさに哲学というものが「生きられる世界」から乖離してしまっているということに危惧しての指摘と読むことが出来るのではないだろうか。つまり、この症例こそ、生きることから離れて、知的な活動や哲学的ジャーゴンを語ることだけに全身全霊を捧げている哲学者、或いは研究者たちへと向けられた示唆的な警鐘だと思われる。

5 現象学の使命

従って、メルロ＝ポンティにおける哲学のあり方とは、世界や他者と生きた関係を構築しつづけていくことを目指す不断の歩みに他ならない。「生きられる世界」へと舞い戻り、驚きに促され、問い掛けつつ、言葉を語る。簡単なように思われるかもしれないこのような現象学の使命は、実は辛苦である。確かな手すりを確保することなく語りつづける道程は、リオタールが指摘したようにおそらく「不安な模索」であることだろう。そしてまさにそのようにして語られた言葉の数々は、例えば小林敏明によって「他性の文体」と形容された、何かを語りだそうとして苦しんでいる西田の文章に通じるところがあるのかもしれない。

補遺 日常における倫理の可能性

本稿においては、〈外部〉を論ずることによって、他者というものを私たちが日常において出会っているような他人ではない他者として想定してしまったように思われなくないかもしれないが、実はそうではない。現代思想の文脈では、他者とは何か異質なもの、或いは私たちの日常に内包し得ない全きものとして語られることが多いが、それでは例えば異文化的他者との倫理については語り得るかもしれないが、しかし日常における倫理からは既に乖離してしまっているように思われなくもない。むしろ、問題であるのは、私たちが既に理解しきってしまったしていると幻想を抱きがちな、普段接している他者に対して他者の他者性を返してやることであり、彼ら、或いは彼女らを顧慮すること、つまり倫理的な関係を築き上げることであると思われる。そして、本稿では少なくともその可能性を示唆するような仕方でも、議論を進めてきたつもりである。例えば、メルロ＝ポンティの言う〈外部〉というものが絶対的な外部ではないということ、或いは創造的言語の創設にしても完全な外部ではなく、内部の〈外部〉にその萌芽があるということ、これらの議論は日常的な倫理の可能性を示唆する有益なものであると思われる。

家族を、友人を、恋人を顧慮するという。つまり、「あなた」に対する

配慮。イラクやアフガニスタン、或いは酒鬼薔薇のようないわゆる他者といわれてしまうものたちに対する配慮が必要なことは言うまでもないが、しかし、まずは身近な他者に対してある種の「敬意」を払うことが出来ないのであるならば、如何なる倫理をも語る事など出来ないのではないか。「倫理」ということ、それ自体を見直すためにも、私たちは「我々」の中に「あなた」を見出すのでなければならない。

おそらくは、ザザとて、彼の前に現れた一人の少女であるに違いないのであるから…

註

- ¹ 従って、本稿においては「他者理解は認識論的に可能であるか？」というような問題系はオミットする。
- ² 『知覚の現象学』からの引用は *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945 に拠る (PP と略記)。引用箇所・参照箇所の指示はページ数で示す。
- ³ 言語について考究する際、「原初的な言葉 (本物の言葉)」と「二次的な言葉」を区別することに何の意味があるのかという批判がもしかするとあるかもしれない。しかしメルロ＝ポンティはこの区別を私たちに要請する。メルロ＝ポンティが言葉において、「原初的な言葉 (本物の言葉)」と「二次的な言葉」をなぜ区別するのかということに関しての議論は以下で取り上げるため、ここでは示唆するだけに留めるが、実際の区別はメルロ＝ポンティ現象学において本質的な区別である。

(すぎもと たかひさ／東京都立大学)